京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

令和4年　9月　28日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　藤　　洋 作　様

所 属 部 局　　工学研究科

職　　名　　インフラ先端技術共同研究講座　特定教授

氏　　名　　塩谷　智基

助成の種類	**令和４年度　・　国際会議開催助成**	
国際会議名	(和文)第76回RILEM年次大会および構造物の再生・保存に関する国際会議 (英文) 76th RILEM Annual Week, and International Conference on Regeneration and Conservation of Structures	
開催期間	令和4年　9月　3日　～　令和4年　9月　9日	
開催場所	京都リサーチパーク（京都府京都市下京区中堂寺南町134, 同粟田町90～94）	
参加者	総数 279名	内訳 国内133名, 国外146名(31箇国) (内, オンライン参加51名(21箇国))
成果の概要	**タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　□ 無　■ 有(　　)**	

会計報告

事業に要した経費総額	25,060,017　円
うち当財団からの助成額	1,000,000　円
その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 会議参加費, 技術展示出展, 協賛金※1, 助成金※2 ※1と※2の団体、企業名については、当会議のホームページを参照(添付資料有)

経費の内訳と助成金の使途について

費目	金額 (円)	財団助成充当額 (円)
運営業務委託費(日本旅行)	14,435,353	0
会場費(京都リサーチパーク)	6,114,262	700,000
バンケット・ディナー	3,594,000	0
学生アルバイト代・交通費	339,718	170,000
委員／事務局旅費・交通費	356,990	0
見学会案内者謝金	130,000	130,000
雑費	89,694	0
合計	25,060,017	1,000,000

当財団の助成について

(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)
新型コロナ禍下において, 実参加者数がまったく先読みできない中でのオンライン・ハイブリッド開催につき, 当初想定した規模よりも実会場における参加希望者数が少なく, 貴財団からの本助成無くして本会議を開催することは非常に困難でした。厚く御礼申し上げます。

成果の概要／塩谷 智基（工学研究科　特定教授）

令和４年９月２８日

「RILEM」は The International Union of Laboratories and Experts in Construction Materials, Systems and Structures のフランス名からつけられたもので，構造・材料に関する世界的な組織である。この RILEM 活動の中心は多くの TC（Technical Committee）活動であるが， TC 活動やその他の活動方針を審議するための総会および関連する委員会がこれまで年に 1 回（原則は 9 月の第 2 週），2017 年からは，欧州と欧州以外の隔年形式として，約 1 週間の日程で “RILEM Week” として開催されてきた。この RILEM Week に併せて，タイムリーで開催場所に適したテーマの国際会議が例年同時開催されており, この度 2022 年の RILEM Week を日本（京都）に招致することに成功した際に,

International Conference on Regeneration and Conservation of Structures（ICRCS）

「構造物の再生・保存に関する国際会議」

という，対象をコンクリート構造物に限定せず，木材，防水材料，組積造など広く「再生・保存」を捉え，当該分野における情報収集と共有に努めるというテーマを掲げた。今回は土木学会･日本建築学会などの協力を得ながら, 公益社団法人 日本コンクリート工学会（JCI）主催で RILEM Week を開催することが出来た。

本国際会議は，令和 4 年 9 月 3 日から 9 日（計 7 日間）の日程で開催した。前半に当たる 9 月 3 日から 6 日にかけては “RILEM Week Kyoto” を，後半に当たる 9 月 7 日から 9 日までは “ICRCS” をそれぞれ開催した。受付登録，本会議，ウェルカム・レセプション（9 月 6 日）はいずれも京都リサーチパーク（京都市下京区）で，バンケット（9 月 7 日）はホテルオークラ京都（京都市中京区）で行った。 9 月 3 日の開催内容は，本国際会議の主要目的の一つである若手人材育成パートを担った PhD. Course Lecture である。現在の建築関係・土木関係分野におけるホットトピックとなる “DX (Digital Transformation”, “GX (Green Transformation)”, “Advanced Analysis of Cementitious Materials ” という３つのコースを設け，各コース 5 講義，合計 15 講義をそれぞれ 80 分ずつ開講した。講義は現地開催とオンライン開催のハイブリッド式で行われ，20 箇国より合計 73 名の博士課程大学院生ならびにポスドク研究者が受講した。国内大学における講義とは異なり，講義中にも多くの受講者から随時質問が寄せられ，あまりの熱気に準備した講義内容を一部消化できないほどの盛り上がりが見られた。 9 月 5 日から 6 日にかけては RILEM における 5 つの委員会（DAC, DEV, 269-IAM，283-CAM，297-DOC）が開催され，各委員会における最新の活動報告ならびに話題提供がなされた。9 月 7 日から開催された ICRCS においては，開会式において 2022 年度 Robert L'Hermite 賞の授賞式が行われ，リーズ大学（英国）の Susan Andrea BERNAL LÓPEZ 教授が受賞された。続けて招待講演者としてミーニョ大学（ポルトガル共和国）より Daniel

V. Oliveira 教授をお招きし，“Seismic Performance and Conservation of Rammed Earth Constructions” と題してご講演頂いた。会議は 4 会場で開かれ，実行副委員長である本報告者，塩谷を含めた 8 名により基調講演を行った。会議最終日である 9 月 9 日には閉会式が開かれ，ポスターセッション賞受賞者と “RILEM PhD travel Grant” 受賞者が発表され，次回となる第 77 回 RILEM Annual Week（ブリティッシュ・コロンビア大学，カナダ）の告知と共に閉会となった。閉会後にはテクニカルツアーとして，我が国に於ける伝統的補修・修復技術の見学を目的として，浄土真宗西本願寺（京都市下京区）ならびに臨済宗大徳寺（京都市北区）の修復現場を訪問した。いずれの会場においても数百年を超える木材を使用し続ける補修工法に対し，驚嘆と感心交じりの熱い質疑応答が見られた。

全体の総参加者数は 279 名（国内 133 名，国外 146 名），参加国数は 31 箇国であった。計 28 の国際会議セッションには 157 件の発表（基調講演含む）が寄せられ，ポスターセッションは 21 件であった。本会議はいずれもオンラインとのハイブリッド開催とし，上記の内 51 名（21 箇国）がオンライン参加であった。会期中には企業展示ブースを設け，10 社より出展があったほか，パンフレット等へ 6 社より企業ロゴの提供が得られた。テクニカルツアーにはそれぞれ 45 名（西本願寺）と 12 名（大徳寺）が参加した。

本会議の実施により，ICRCS のテーマである「構造物の再生・保存」に関して，我が国の防災に資するのみならず，海外の著名な研究者を特別講演者として招聘し，PhD Course の開催や国内の研究者との積極的な技術交流により，国内において先端技術情報を共有することができた。本会議における技術交流を基盤とし，インフラ構造物・建築物における維持管理社会を実現させることで，簡便かつ，合理的な社会インフラの健全性評価が可能となり，引いては，世界的に注目されている持続可能社会や低炭素社会の実現へ大きく貢献することが期待できる。

以上のように，本国際会議は成功裏に終わり，RILEM 内における我が国のプレゼンスを大きく向上させることが出来た。このことは，今後の建築・補修技術に関する国際標準策定時において，我が国が主導的な役割を分担することに繋がる。本国際会議の開催は，我が国が保有する補修・保存・再生分野における先端技術の一つでも多くが，将来的に国際標準技術として伝播することへ，大きな貢献を果たしたことを確信している。